まじこい！～血みどろの手で少年は光を求める～

佐久紗府斉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まじこい！～血みどろの手で少年は光を求める～

【Ｎコード】
Ｎ６７０３Ｘ

【作者名】
佐久紗府斉

【あらすじ】
ありとあらゆる暗殺術を極めた歴代最高の暗殺者の少年がいた。
でも・・・「違う！俺は暗殺なんかしたくない！！」その叫びは少年を飲み込もうとしている運命を変えられるのか！
他の小説も執筆中ですので更新は鈍足の極みになると思われます。
興味を持ってくれた方はぜひどうぞ！！
あと作者は原作をほとんど知りません・・・
なので口調とかストーリーとかほぼカオスです。

「もうこれオリ小説やんけ！」と突っ込まれそうなくらい
違うと思います。あまりエロくも無いです。「こんなの違う！」
とか「こんなキャラじゃない」と思った人は
お引取り願います・・・

プロローグ～少年は暗殺のエキスパート！？～（前書き）

ども、作者です。大して
原作を知りもしないのにやらかしてしまいました・・・
ッ更新はもう一つがメインですので遅めになると思います。
ではまずはプロローグから、どうぞ～（ｎ‘∀‘）η

プロローグ～少年は暗殺のエキスパート！？～

ダアン！！　『バスッ！！』

ある男が頭をぶち抜かれ、大量の血を撒き散らしながら床に倒れ伏した。
俺はそれを見ている。・・・・

自身が持っているスナイパーライフルのスコープから。

今俺がいるところは雑居ビルの屋上。標的のアジトから約五キロほど離れた高いビルだ。
本来ならそんな距離から狙撃をしても到底当たらない距離だ。
しかし俺はそれをいつものことのように難なくこなす。
他人が今の俺を見れば絶対びびるだろう。今の俺は完全な暗殺者モード。
目は鷹のようでとても表情はとても冷たい。

「はあ・・・・」

暗殺者モードから標準モードに『切り替え』、一息吐く。
俺の名前は「空裂（くうざき）　零斗（れいと）」・・・・・・変な名前だろ？・・・・・
まあ今更変えようとも思わないが。

『ウラ』の業界に関わる者ならば知らない奴はいないだろうとまで言われてる。
・・・らしい。

自分で言うのもなんだが若干十六歳にして狙撃・接近・『気』の総量、使い方等々・・
全ての面で『殺し』の頂点に上り詰めた。
ナンバーワンだよナンバーワン。・・・・はあ（；一д一）＝３・・・・また溜息が出る。

今回依頼されたのは政府の重鎮・・・・ではなく。とあるデカイ麻薬密輸組織の
リーダーを「やれ」と言われた。

依頼者はなんと・・・警視庁の上層部だぜ？・・・・黒いな警察も・・・・・・（汗）

たまにこんな風に警察とかからも普通に依頼が来る。
・・・いくら捕まえ難いっつってもさあ・・・いいの？・・・

「・・・でも今はこうするしかないんだ。・・・標的の死亡を確認。任務終了（ミッションコンプリート）だ。」

一瞬で俺の愛銃『Ｌ９６　スナイパーライフル（通称Ｌクロ）零斗フルカスタム』を
バラし、でかいアタッシュケースに入れてごつい鍵をかける。
指紋、ＤＮＡ情報を全て残さず『消し』、俺はビルを後にする。

夜の街を俺は歩いてうちに帰る・・・捕まる心配なんかねえ。五キロ先から撃ったなんて
誰も気づかんし依頼者は警察側。捕まる要素ねえじゃん。

・・・・ほんとは殺しなんかやりたくない。

俺だって高校生だ。友達と毎日馬鹿騒ぎしたい。恋だってしたい。
今俺は川神氏の川上学園に通っている。・・・いるんだが。明日・・・
いや、
今日から二年生だが。去年は一日に五件以上は殺しの依頼が来て
授業になどぜんぜん出ていない。ごく稀に出てても「空裂くん。お電話です。」と
また殺せと命令される。ちょっと『もうやめて』的なことを言ったんで
もう普通に授業出れると思うんだが・・・

空裂家は代々殺し屋稼業らしい。『全く、零斗は家の誇りじゃわい。』
とかじーさんも言ってたわ。何かいつの間にか他のやつらには
『地上最強の暗殺者』とか言われて畏れられてるし・・・他の暗殺者に避けられるって
どうなのよ・・・まあこれも運命だと思って諦め・・・無いッッ！！
殺し屋稼業からいつかは抜け出す！絶対！！・・・だってさあ・・・

違うもん！！こんなことしたくない！

「はあ・・・明日（今日）から二年生かあ・・・少しは『何か』が
変わってくれると
いいんだけどな・・・・・」

俺の呟きは誰にも聞かれること無く深夜の闇に溶けていく・・・

プロローグ～少年は暗殺のエキスパート！？～（後書き）

はい。プロローグ長いですね・・・

まあこれからもぼちぼち更新しますんで

皆さんぜひぜひ応援よろしく！お願いします！！

第一話　「新たな日常の開始？」　（前書き）

ども、作者の佐久紗です。

第一話が始まりました・・・・・が！

早速作者の『原作殺し（シナリオブレイカー）』が発動したようです・・・

二年になって初っ端から川神大戦です。ちなみに途中留学の

クリスとかは一年の時に留学イベント→そのまま二年へ・・・

と言う流れです。原作の途中参加キャラはもういると思って下さい。

まあそれではカオスな本編をどぞ～。

第一話　「新たな日常の開始？」

「へ～ここが川神学園かあ・・・・って・・・・もう一年間はこの生徒だったよ・・」

学園の入り口でそんなことを一人ごちる。や～っと来れたよここに・・・・

そこかしこで生徒達がわいわいやっていた。が、俺には友達が当然いない。
少ないんじゃない。居ないんだ・・・

「はあ・・・・もう教室・・・・Ｆクラスだったか・・・・行こ・・・・」そう言い、
校舎の中に入った。

本人は気づいてなかったがその場のほとんどが零斗を見ていた。
なぜなら・・・・零斗があまりにも異質な気迫を放っていたからだ。

漆黒の髪は艶を帯び、少し癖っ毛が立っている。そして右のこめかみは

どす黒い赤に染まっている。ちなみに地毛。顔は端正でカッコいいほうだが

話しかけづらい雰囲気をかもし出している。そして持ち物は普通の鞄と

いつでも『依頼』を受けられるよう、『Ｌクロ』の入った大きくてゴツイアタッシュケース

を持っている。制服は丈は同じだが袖などの幅がかなり広い。オーダーメイドで

ピッタリだけどゆったり、という着流しのような格好でそれがまた男女問わず

注目を集めていた。

「ほう・・・・・・」

そして、注目していたのは生徒達だけではなかった。たまたまそこに居合わせた

学園長までも、いや、学園長のほうがまじまじと零斗に見入っていたのだ。

何故か。それは零斗から微量に漏れる隠しきれていない濃密な『気』だ。

量こそあるかないかの量だが何より質が尋常ではない。まるで触れればやけどをするような
濃い、ひたすらに濃い『気』。学園長はそれに魅入られたように零斗を見つめ・・・・

「ほお・・・・ほっほっ。面白い生徒がいるようじゃのう。」そう呟くのだった。

ある意味衝撃的なデビューを果たした零斗であった・・・・

～Fクラスの教室～

「さって、と席は・・・・ここだな。」『Lクロ』のケースを床に置く。
「ズゴン!!」と音がし、少し教室に振動が響いた。そう、俺の『Lクロ』は普通のスナイパーライフルと比べて重量、大きさ、全てが規格外に出来ているのだ。

「ふう・・・っと!」席について皆が見ていることに気づき、机に伏せる。

「ははっ!やっぱり俺達は一緒だな!よろしく!!」　「「おう!!」」　「うん!」

「そうね。」　「そうだな！」

そんな声が聞こえてきた。仲いいな・・・・「あ！あたしの席はここね！！」

と、そこで隣に誰か座ってきた。「んあ？」誰だ？と顔を上げるとそこには・・・・・

赤っぽい髪の活気に満ち溢れたような少女がいた。

「あ、あたしは川神一子、よろしくね！」川神・・ああ、川神学園・・・読めたぞ。

ってかこいつどっかで・・・・・・あ。

「お前は・・・・河川敷の・・・・・・・・・」

「？？・・・・・・あ！！もしかしてたまに河川敷でボーっとしてた人！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」失礼な、あれはれっきとした修行だ。

心を『無』にするための、な。心が無の状態だと第六感を著しく磨くことが出来るのだ。

しかしコイツ・・・・純粋なヤツだな・・・・心が洗われるようだ。

特に俺は人間の汚い部分をずっと見てたから余計に和む・・・・・

「でさ！あなたの名前は！？」

「・・・・・・・空裂　零斗だ。」　「そう、よろしくね空裂君！」

「・・・・・・・・・・・」なんだろう、ここまで言われると黙るしかない。

ってか俺こんなに話すの苦手だっけ？　環境とは恐ろしいもんだな・・・・・

と、そこで先生が教室に入ってきた。「全員席に着け！」はいはい、着いてるよ・・・

「さて、私はこのFクラス担任の小島　梅子だ。まあ皆は歴史の授業で知っているだろう。出席を取るぞ。」

・・・・・ってゆーかさ、何で出席って必要なんだろう。空いた席見れば分かるじゃん。

あと教師がガチの鞭を持ってるってのはシュールすぎやしないか？

これがほんとの「ガチムチ」なんつってwww・・はい・・・ごめんなさい・・・・・・・

「・・・・・・・（はい！）・・・・・・・・（はい！）」だんだんと呼ばれていってる。

「空裂零斗」　「ほ～い。」・・・・・・あ。やっべ・・・・・。

『ピシッ！』と一気に教室の空気が凍った・・・・・気がした・・・・。

『ヒュビュン！！』刹那、鞭の二撃が顔に迫ってきた。

だがこの程度のスピード、俺には止まって見える！

俺はダメージを殺し、その鞭を腕に絡めて一気に奪い取った。

「・・・・すいません。つい口が滑っちゃいました。」鞭を返しながら言う。

「ッッ！！・・・・まあ分かったのならいい・・・・さて、今日は重大な報告がある。」

驚愕の色を隠せてない先生。　ん？なんだ？？

「いざこざの続いていた二年FクラスとSクラスの件だが、」

・・・ちょちょちょ！ちょっとまって！？まだ二年になってから一日もたってないよ！？

「先生、まだ進級して一日目ですけど・・・・・」誰かが言う。そう、その通りだ。

「・・・・一年の時からＳクラスとＦクラスの面子はほとんど変わっていないだろう。
まあ成績最高と最悪のクラスだからな。」

あれえ？・・・・クラスってこれ最初から成績で決まるんだったの？？

「そのとおりだ。」なんと！読まれた！・・・・・おーこわ・・・・・

「で、そのＦクラスとＳクラスのいざこざは・・・・・」ゴクリとつばを飲む一同。

一週間後、『川神大戦』にて決着をつける！！！」　！！・・・・・
で、

川神大戦って何ぞや？？

「川神大戦とは、学園全体を巻き込んだ２－Ｆと２－Ｓの合戦であり、互いのクラスの委員長を取
り押さえれば勝利となる。もちろん規定の武器かレプリカとして登録した武器は
使用可だ。外部の人間に協力を仰ぐことも出来る。」

ああ・・・・つまり戦争をやるわけね・・ＳＦ戦争か・・・いいじゃん。

人殺し以外で力を振るうのはひさしぶりだな。

「では、これで終わる。」梅子先生の話が終わり、休憩に入る。・・・と、

「く、空裂君凄いね！梅子先生から鞭を奪い取るなんて！！」何か川神が言ってきた。

なんだか興奮した面持ちだ。

「そうか。」と適当に返しておく。クラスの皆はっと・・・驚いてはいるが

俺の話しかけづらい雰囲気のせいで話しかけてこないようだ。

願ったり叶ったり・・・・・・・・・・・・じゃねーよっ！

無意識に意識が孤独を選んでいた・・・・。気をつけねーとな・・・・。

～side一子～

私の隣の席は今までに何回か見たことのある人だった。でも面識は無いに等しいけど。

その人は河川敷でたまに呆けたように遠くを見ている人だった。

最初、その空裂君が隣の席に座っていたのを見た時は一瞬「うっ」とたじろいだ。

それはあまりにも近寄りがたく、「来るんじゃない」と言わんばかりの

冷たい気迫だったから。

それでも私は少しだけ勇気を出していつものように話しかけてみた。

そして、

「んあ？」と、顔を上げた空裂君の顔を見て私はとても驚いた。

やはり人を拒絶するような雰囲気。だけどその目は人とのつながりを強く望んでいるような

寂しがり屋の子供のような切ない目で。

そして、さらに驚くことが起こった。ウメ先生の出席確認で空裂君は「ほ～い。」と

間の抜けた返事をしてしまったのだ。直後にウメ先生の鞭が飛んだ。

でも、一瞬後には

鞭は空裂君の手に治まっていた。クラス全員が唖然とする。もちろん私も。

私にはウメ先生の鞭の動きすら見えなかったのに！

授業中も私は彼の横顔を眺めていた。すると、ときどき彼の表情がふいにフッ・・・と

曇る時がある事に気づいた。そのどれもが「寂しさ」や「諦め」や「後悔」と言うような

表情だった。

彼に何が起こったのだろう。何が起こっているのだろう。

もっと知りたい、そう思った。そして・・・・もっと仲良くなりたいと思った。

このずっと孤独に耐えてきたような瞳をしている彼を支えてあげたいと思った。

私はファミリーの皆に、いろいろな人に支えられて楽しい『今』を送っている。

だから・・・・今度は私が、この人の孤独をといてあげたい。

そう強く思った。

～side　out～

第一話　「新たな日常の開始？」　（後書き）

はい。一子にフラグ（の様な何か）が立ちました。早いですね・・・

まあこっからは長々と駄文を書く予定です。
この原作の崩壊度にあなたは着いてこれるか！？ｗｗｗｗ
次はおそらく主人公紹介的な何かになると思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6703x/

まじこい！〜血みどろの手で少年は光を求める〜

2011年10月19日02時09分発行